

## ポジティブ・イリュージョン、楽観的傾向と 親子関係、自尊感情、レジリエンスとの関連性について

On the relationship between positive illusion and optimistic tendency, and  
self-esteem, parent-child relation and resilience

池永 衣里

IKENAGA Eri

(和歌山大学教育学部第61期生)

菅 千索

SUGA Sensaku

(和歌山大学教育学部心理学教室)

本研究では大学生116名（男子：66名、女子：50名）を対象に、ポジティブ・イリュージョンに関する質問紙、楽観主義尺度、親子関係診断尺度（EICA）、自尊感情尺度、精神回復力尺度を実施し、ポジティブ・イリュージョンおよび楽観主義尺度と親子関係、自尊感情、レジリエンス（精神回復力）との関連について検討した。その結果、被験者全体においては、自己に対するポジティブ・イリュージョンおよび楽観的傾向に対して自尊感情およびレジリエンスについて有意な相関があることなどが明らかになった。一方、全体としては、ポジティブ・イリュージョン傾向と親子関係のあいだに有意な相関はほとんど認められなかった。しかしながら、男子においては、ポジティブ・イリュージョンの「社交性」「容姿」とEICAの「統制性」、ポジティブ・イリュージョンの「運」とEICAの「自律性」「同一化」「受容性」「統制性」、またポジティブ・イリュージョンの「統制」とEICAの「同一化」で正の有意な相関が見られた。他方、女子においては、ポジティブ・イリュージョンの「運」とEICAの「情緒的支持」「受容性」においてのみ正の有意な相関が見られた。

**キーワード：**ポジティブ・イリュージョン、楽観的傾向、親子関係、自尊感情、レジリエンス

### 問題と目的

従来、自己や現実について出来るだけ正確に認知することが心理的な健康を維持するために重要であると考えられてきた。しかし、多くの社会的認知に関する研究によって、通常、私たちの判断は自己奉仕（セルフ・サービング）によってゆがめられる傾向にあることが報告されており、近年では自分にとって都合の良いようにゆがめられた認知の方がむしろ一般的であり、それが心理的な健康や適応に影響を及ぼすという新しい健康観が示されている。また、自尊感情に関する研究においても、自尊感情の高い人は適応的であり、自分の都合の良い方向に現実認識をゆがめることで現実とうまく交渉できることが報告されている（上出・大坊，2004）。

このような認知の中で特に注目されているのがポジティブ・イリュージョンという現象であり、欧米においては様々な研究が行われている。ポジティブ・イリュージョンとは、自己高揚の動機に基づく認知バイアスのことで、「実際に存在するもの・ことを、自分に都合良く解釈したり想像したりする精神的イメージや概念」と定義されている（Taylor & Brown, 1988）。この傾向は、単なる一時的なエラーやバイアス

ではなく、普遍的・持続的・体系的な傾向であることから「illusion（幻想）」と名づけられたという。

このポジティブ・イリュージョンは3つの領域から構成されており、第1は自分自身の特質や過去の行為について肯定的・積極的に認識する自己高揚、第2は自分に関する将来を楽観的に考えることである。たとえば、自分自身の未来にポジティブな出来事が起こる可能性を他者よりも高く見積もり、ネガティブな出来事が起こる可能性を低く見積もる傾向である（Weinstein, 1980）。また第3は、自己の環境をコントロールする能力を過大に評価する傾向であり、自分自身が環境に対して、実際よりも過大にコントロールできると捉えることを指している。実際は偶然によって成否が決まるような状況でさえも、まるで自分自身が成否をコントロールできるかのように評価してしまうのである（Langer, 1975）。これら3つのポジティブ・イリュージョンが心理的な健康に結びついており、心理的に健康な者は実際以上に自己を良いものと考え、自分の未来を明るく描き、自己の統制力を強く信じる傾向にあるとされている。こうしたポジティブ・イリュージョンの検討にあたって、Taylor & Brown（1988）は、被験者に対して癌などのネガティブなイベントが、一般的な人と比べてどのくらい起こりにく

いかについて評定を求めた。その結果、大多数の人が自分は平均よりも上であるとみなしたが、多数の人が他人よりも優れているということを論理的に説明できなかったために、「イリュージョン」という用語が使われたのである。実際に、低い自尊感情や高い抑うつ傾向は、むしろ現実的バランスの取れた認知により生じており (Alloy & Abramson, 1979)、ポジティブ・イリュージョンが健常者に生じる一般的な傾向であることが報告されている (Taylor & Brown, 1988)。

このように、欧米においてはポジティブ・イリュージョンについての理論化や研究が多数なされているが、日本ではほとんど検討されておらず、さらに、心理的な健康との関連性を検討した研究はほとんど認められない。その背景には、日本人の心理的な健康は、欧米文化のそれとは異なった観点から把握される必要性、すなわち、日本において自己高揚的な認知は、心理的な健康には貢献しないという前提があるためだと考えられている (外山・桜井, 2000)。また遠藤 (1995) は、相互浸透的で状況依存的な傾向が強い日本人においては、個人が感じているポジティブな特性によっては心理的な健康が規定されず、むしろ他者や周囲の世界との良好な関係の中で心理的な健康が生じることを指摘している。

一方、水野・西本・井上 (2006) は、自己肯定感を測定することによって謙遜している傾向を把握できると考え、自己肯定感尺度による研究を行った。そこでは自己に対するポジティブ・イリュージョンが強いほど、他の被験者よりも自己を高く評価しており、相対的に自己肯定感も高くなると報告されている。さらに田中 (2005) は、自己肯定感について、抑うつ傾向と負の関連性が存在し、自己肯定感が心理的な健康の程度を予測する重要な指標であると述べている。すなわち、自己肯定感の高い傾向は、自己に対する存在価値を上昇させ、その結果、抑うつなどの心理的ストレス反応が軽減すると考えられているのである。

また、自己肯定感に類似する概念である自尊感情については、学校教育における2008年以降の学習指導要領の改訂において、より重要視されるようになっていく。そこでの基本的な考え方は「豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」と記され (平成20年文部科学省答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」)、この「豊かな心」の育成には自尊感情が重要であるとされている。

そして文部科学省の「豊かな心をはぐくむ教育の在り方に関する専門部会」における主な意見として、(1) 自分のかたちをどうなってもよいと思っていれば、他人のかたちを大事にしたり尊敬したりできないし、そういう状態では何を教えても単なる知識に過ぎない。子どもの頃から、まず自尊感情、自己肯定感をもって自分を大切にすること、次に社会の中で助け合って生きていること、更に助け合うことで自分の人生が広がってよりよい充実したものになることを、順序立った感覚

としてしっかり身に付けさせる必要がある。(2) 自己肯定感や自尊感情は、親など家族との関係性の中で育つ面が大きいのではないか。(3) 自己肯定感が低いということについては、謙虚さという日本の価値観の影響もあり得るので、他者に関わりながら自分を伸ばしていこうという未来に対する意識についても併せてみていく必要がある、といった点が挙げられている (平成17年9月27日第6回文部科学省中央教育審議会、初等中等教育分科会、教育課程部会「豊かな心の在り方に関する専門部会」)。そのほか我が国の児童・生徒については、生命尊重の精神や自尊感情の乏しさ、基本的な生活習慣の未確立、規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下など、心の活力が弱っているとの指摘もなされている (平成23年度文部科学省白書「第2部第2章子どもたちの教育の一層の充実」)。

また和歌山県では、将来にわたって幸福な社会生活を営めるために「豊かな心や社会性」を身に付けることは、子どもの学習する権利、発達する権利であるとの問題提起がなされている。そして自尊感情の乏しさ、規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下などの状況は、子どもたちの発達を実現し、これからの「知識基盤社会」を生き抜く力を育てるという基本的な権利にかかわる克服すべき課題であると位置づけられている (平成24年3月23日第9期きのくに協議会「本県学校教育の今後の在り方について—和歌山の教育を元気にするために—」)。

伊藤 (2001) の研究では、子どもの自尊感情の高低には、保護者の養育態度が関連していることが報告されている。また葛西・永尾 (2004) らは、中学生の自尊感情や規範意識の高低に、中学生の居住地や祖父母との生活の有無、第何子であるかなどはあまり関連がないことを明らかにし、彼らの自尊感情と規範意識の高低に保護者の親役割が関係するとされている。しかし、ポジティブ・イリュージョン傾向と親子関係についての研究は、ほとんどなされていないのが現状である。

そこで、本研究では外山・桜井 (2000) によって報告されたポジティブ・イリュージョンと心理的な健康の関係性の存在を支持する立場と、水野・西本・井上 (2006) においてポジティブ・イリュージョンと自己肯定感との関連性を支持する立場を踏まえて以下の予想を立てた。

**予想1**：自己におけるポジティブ・イリュージョンや楽観的傾向が高いほど、自尊感情は高くなる (自己肯定感と自尊感情は関わりも深いため、先行研究のように自己におけるポジティブ・イリュージョンが自己肯定感に影響を及ぼすのであれば、同じように自尊感情にも影響を及ぼすであろう)。

また、自尊感情が親子関係に影響を受けるという先行研究を踏まえて次の予想も立てた。

**予想2**：自分に対するポジティブ・イリュージョンや楽観的傾向が高いほど、思春期の親子関係において、独立心や自律性を尊重してくれるような態度をとって

くれていると感じている傾向にある。

**予想3**：ポジティブ・イリュージョンや楽観的傾向が低いほど、思春期の親子関係において、親から厳格な教育を受け統制されていたと感じている傾向にある。

加えて、ポジティブ・イリュージョンが心理的な健康と関連がある立場を踏まえた上で、心理的な健康と関連のあると考えられるレジリエンスとの関係性においても以下の予想を立てた。

**予想4**：ポジティブ・イリュージョンや楽観的傾向が高いほどレジリエンスも高くなる。

以上の予想を実証的に検証すると共に、自己に関すること以外のポジティブ・イリュージョン傾向の高低と自尊感情および親子関係の関連性も検討することが本研究の目的である。

## 方法

### 1. 被験者

和歌山大学教育学部の大学生116名（19歳～24歳）。学年別および男女別の人数は表1に示す。

表1 被験者の内訳と合計

	2 回生	3 回生以上	合計
男子	46	20	66
女子	26	24	50
合計	72	44	116

### 2. 質問紙

#### ①ポジティブ・イリュージョンに関する質問紙

外山・桜井（2000）のポジティブ・イリュージョンを測定するための質問紙の一部を使用した。この質問紙はTaylor & Brown（1988）のポジティブ・イリュージョンの定義にしたがって、「自己」「楽観主義」「統制」の3つの領域から構成されている。この質問紙について水野・西本・井上（2006）が因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行い、3領域それぞれのスクリープロットにおける固有値の減衰状況と因子の解釈可能性より『自己』では3因子、『楽観主義』では2因子、『統制』では2因子が抽出された。因子負荷量が絶対値0.40を以上であることを基準にして、それぞれ『自己』からは25項目中19項目、『楽観主義』からは12項目中10項目、『統制』からは12項目中10項目が選出されたが、本研究では『自己』と『統制』の29項目だけを使用した。『自己』は「社交性・知的能力（以下、社交性と記す）」「容姿」「やさしさ」の3因子で構成されており、『統制』は「努力可能」「運」の2因子で構成されている。そして本研究では「他の大学生と比べてあなたは？」について評定を求める想定的方法による7段階評定とした（1点＝全くそう思わない、2点＝かなりそう思わない、3点＝ややそう思わない、4点＝どちらとも言えない、5点＝ややそう思う、6点＝かなりそう思う、7点＝非常にそう思う）。

#### ②楽観主義尺度

Duval & Wicklund（1972）によると、人は自分に注意を向けなくてはならない状態におかれると（客体的自覚状態）、こうありたいという自分（理想自己）と今の自分（現実自己）を比較するようになる。そして理想自己と現実自己との間にズレがある場合には不快に思い、それを克服して現実自己を理想自己に近づけようとする。しかしズレを克服しようとするかどうかには個人差があり、努力すればズレを克服できると考える楽観主義傾向の者と、どうやってもズレを克服するのは無理だと考えてしまう悲観主義傾向の者がいるという。

Carver & Scheier（1985）はこのような楽観主義傾向の個人差を測定するためにLife Orientation Testを開発した。本研究で使用したのは中村（2000）が原尺度を邦訳したもので、12項目からなり「楽観的自己感情」、「悲観的自己感情」の2因子からなる5段階評定である（全くあてはまらない＝1点、ややあてはまらない＝2点、どちらともいえない＝3点、ややあてはまる＝4点、非常にあてはまる＝5点）。なお、12項目の内4項目はフィラーである。

#### ③親子関係診断尺度（EICA）

EICAと略記されるこの尺度は、Schaefer（1965）の親子関係テスト（Children's Reports of Parental Behavior Inventory）の260項目を翻訳したものを出発項目として、因子的真実性の原理によって項目分析を行い、最終的には各10項目、合計40項目からなる尺度で、辻岡・山本（1979）によって作成された。父と息子、父と娘、母と息子、母と娘という人間関係のいずれの場合においても高い因子的妥当性を有する質問項目からなっている。小・中高生を中心とした親の養育態度を調べる質問紙であるが、年齢層を大学生に拡大して施行することも不可能ではない。本研究では「中学生の時の保護者と家の中でのやりとりについて」という形で被験者から回答を得た。

一次因子は4つの下位尺度からなるが、情緒的支持ESは親の子どもへの情緒的な支持、親と子の平等、子どもの知的向上の促進、子どもの独立心の奨励、子どもの社交性の育成など親が子どもを承認し受容する傾向を測定するものである。この因子の高得点は支持で、反対に低得点は不支持を示す。同一化IDは親の保護、親の子に対する所有欲、干渉、親からの愛情の表出、子ども中心主義など、親の一体感的な愛情が強く表明されることを子どもが認知していることを測定するものである。高得点なほど同一化傾向が強く、低得点は子どもへの無視、拒否、無関心を意味する。統制COは家庭における罰や厳格さ、お小言、親のイライラ、子どもへの否定的評価、罪悪感による統制、拒否、強制など統制の厳格さを子どもの側がどの程度強く受け止めているかを測定するものである。高得点は強い統制を、低得点は寛大さや甘いしつけを意味する。自律性AUは親が子どもの行動に制限を加えない、しつけが甘い、自由にしてくれる、命令的ではない、独立心や自律性を尊重してくれると子どもが感じていることを



測定するものである。高得点は自律性の否定を意味し、低得点は尊重を意味する。

一次因子を加算した二次因子は、拒否性[RE]＜→受容性[AC]（一次因子のESとIDを合計したもので、親の子どもへの承認、受容、愛情を示す；以下「受容性」と記す）と自律性[AU]＜→統制性[CO]（一次因子のCOとAUを合計したもので、親の子どもへの統制の強さを示す；以下「統制性」と記す）とされている。なお、各項目に対しては3段階評定である（はい＝2点、どちらでもない＝2点、いいえ＝0点）。

#### ④自尊感情尺度

Rosenberg (1965) は、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情と考えている。また、自身を「非常によい (very good)」と感ずることではなく、「これでよい (good enough)」と感ずる程度が自尊感情の高さを示すと考えており、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いていることを意味しているとされている。

本研究で使用したのはRosenberg (1965) が作成した尺度の山本・松井・山成 (1982) による邦訳版で、5段階評定である（あてはまらない＝1点、ややあてはまらない＝2点、どちらともいえない＝3点、ややあてはまる＝4点、あてはまる＝5点）。

#### ⑤精神回復力尺度

この尺度は小塩・中谷・金子・長峰 (2002) によるもので、レジリエンスの状態に結びつきやすい心理的特性（精神的回復力とよぶ）を「新奇性」「感情調整」「肯定的な未来思考」の3側面から測定する。全21項目で「新奇性追求」が7項目、「感情調整」が9項目、「肯定的な未来思考」が5項目で、それらの合計点を精神回復力得点とする。なお、レジリエンスとは、困難で脅威的な状況においてうまく適応する過程・能力・結果のことをいう (Masten *et al.*, 1990)。レジリエンスの状態にある者は、困難や脅威に直面し、一時的に精神的な不健康の状態に陥っても、それを乗り越え、精神的病理を示さず、よく適応している者である。

この尺度の特徴は(1)わが国では開発されていない新たな適応の指標として精神回復力に注目している、(2)他のストレスの概念と異なり、定期的な回復を導く心理的特性および能力に着目している、(3)心理社会的発達において大きな危機や困難に直面すると想定される青年期を対象としていることで、5段階評定である（いいえ＝1点、どちらかというといえ＝2点、どちらでもない＝3点、どちらかというといえ＝4点、はい＝5点）。

### 3. 手続き

集団式により、最初に研究への協力依頼およびプライバシー関連等の一般的な説明を行った後、フェイスシート、ポジティブ・イリュージョンに関する質問紙、楽観主義尺度、親子関係診断尺度EICA、自尊感情尺度、精神回復力尺度が印刷された冊子を配布した。フェイスシートでは学年、性別、年齢、クラブ・サークルの所属、住居、きょうだいの有無をそれぞれ書きこむように作成した（これらの一部は紙面の都合で本報告には含まれていない）。冊子は尺度が4種類あったためにカウンターバランスがとれるよう尺度の順を入れ替え、5種類の冊子を均等に配布した。そしてそれぞれに質問紙への回答に関する教示や注意事項をまとめて述べたうえで回答させた。時間制限は課さなかったが、実際の所要時間はおよそ10分から20分程度であった。

### 結果と考察

#### 1. 相関分析

ポジティブ・イリュージョン（以下「P.I.」と略記する）を測定する質問紙および楽観主義尺度とEICA（親子関係診断尺度）、自尊感情尺度、精神回復力尺度との相関係数を、全体及び性別（男子・女子）ごとに求めた（表2～4）。

##### 1-1. 被験者全体について

全体（表2）ではP.I.の「社交性」とEICAの「情緒的支持」「統制性」において弱い正の相関がみられた。また、P.I.の「運」とEICAの「同一化」「情緒的支持」「受容性」「統制性」の間にも弱い正の相関があった。P.I.の「統制」とEICAの「同一化」「受容性」の間に

表2 ポジティブ・イリュージョン尺度、楽観主義尺度とEICA、自尊感情尺度、精神回復力尺度の相関係数（全体：116名）

測定変数		EICA						自尊感情	精神回復力			
		自律性	統制	同一化	情緒的支持	受容性	統制性		新奇性追求	感情調整	肯定的な未来思考	精神回復力合計
ポジティブ・イリュージョン	社交性	0.111	0.090	-0.014	0.154†	0.091	0.197*	0.638***	0.550***	0.399***	0.518***	0.580***
	容姿	0.052	0.086	0.020	-0.023	-0.004	0.135	0.557***	0.270***	0.306***	0.358***	0.373***
	やさしさ	0.106	0.014	0.001	0.110	0.071	0.118	0.514***	0.255***	0.347***	0.202**	0.337***
	自己	0.109	0.080	0.000	0.106	0.068	0.185**	0.682***	0.456***	0.421***	0.453***	0.532***
	努力可能	-0.035	0.032	0.094	-0.029	0.033	-0.003	-0.146	0.074	-0.044	-0.005	0.006
	運	0.099	0.110	0.239**	0.240***	0.285***	0.205**	0.357***	0.270***	0.227***	0.211***	0.286***
	統制	0.035	0.103	0.245***	0.136	0.222**	0.135	0.111	0.248***	0.114	0.138	0.198***
主楽観主義観	楽観	0.054	0.109	0.160†	0.192*	0.211*	0.160†	0.427***	0.400***	0.488***	0.456***	0.545***
	悲観	-0.071	0.095	-0.178†	-0.245**	-0.255**	0.023	-0.481***	-0.273**	-0.251**	-0.343***	-0.342***

注：\*\*\* $p < 0.001$ 、\*\* $p < 0.01$ 、\* $p < 0.05$ 、† $p < 0.1$

も弱い正の相関がみられた。一方、P.I.の『自己』領域は「自尊感情」および精神回復力尺度の全ての下位項目において有意な正の相関があった。また楽観主義尺度の「楽観」と「自尊感情」および精神回復力尺度の全ての下位項目において有意な正の相関、その逆で楽観主義尺度の「悲観」と「自尊感情」および精神回復力尺度の全ての下位項目においては有意な弱い負の相関がみられた。

その結果、全体に関してP.I.と親子関係では有意な相関はみられたものの、相関係数は低いものが多く、あまり関連性はなかったため予想2と3の検証には至らなかった。それに対してP.I.が『自己』領域で高いと自尊感情尺度も高くなっており、先行研究と同様で予想1を支持する結果となった。また、P.I.が『自己』領域で高くなるにつれてレジリエンス（精神回復力）も高まるということが明らかになったことから予想4も支持されている。

#### 1-2. 性別ごとについて

性別ごとにみた場合、男子（表3）については、P.I.の「社交性」「容姿」とEICAの「統制性」において弱い正の相関があった。また、P.I.の「やさしさ」とEICAの「統制」において、有意な傾向にある弱い正の相関がみられた。P.I.の「運」とEICAの「自律性」「同一化」「受容性」「統制性」においては、有意な正の相関があった。加えて、P.I.の「統制」とEICAの「同一化」

には弱い正の相関があり、P.I.の「統制」とEICAの「受容性」「統制性」においては有意な傾向にある弱い正の相関がみられた。また、P.I.の「自己」と「自尊感情」において女子よりも高い有意な正の相関、楽観主義尺度の「悲観」と「自尊感情」においては女子よりも高い有意な負の相関がそれぞれ認められた。

これらのことから統制的な育てられ方をしている男子については、『自己』領域におけるP.I.が女子よりも若干ではあるが強く働いているということが明らかになった。また、『自己』についてのP.I.が働いている男子は、P.I.が同様に働いている女子よりも「自尊感情」が高いことも示された。全体の結果と同じく男子でも予想1を支持する結果であったが、予想2と3におけるP.I.と親子関係の検証には至らなかった。

女子（表4）については、P.I.の「社交性」とEICAの「同一化」において、有意な傾向にある負の相関があった。また、P.I.の「運」とEICAの「情緒的支持」「受容性」では弱い正の相関がみられた。P.I.の『自己』領域とEICAの「同一化」では有意な傾向にある弱い負の相関が、P.I.『統制』領域とEICAの「受容性」には有意な傾向にある弱い正の相関がみられた。加えて、P.I.の「容姿」「やさしさ」「自己」領域と精神回復力尺度の「新奇性追求」の間においては有意な正の相関があった。楽観主義尺度の「楽観」と精神回復力尺度の全ての下位項目において有意な正の相関が認め

表3 ポジティブ・イリュージョン尺度、楽観主義尺度とEICA、自尊感情尺度、精神回復力尺度の相関係数（男子：66名）

測定変数		EICA						自尊感情	精神回復力			
		自律性	統制	同一化	情緒的支持	受容性	統制性		新奇性追求	感情調整	肯定的な未来思考	精神回復力合計
イリュージョン・ポジティブ	社交性	0.161	0.219	0.130	0.105	0.129	0.322**	0.662***	0.494***	0.410**	0.507***	0.557***
	容姿	0.107	0.210†	0.119	-0.091	0.010	0.270*	0.584***	0.126	0.243*	0.327**	0.269*
	やさしさ	0.018	0.209†	0.127	0.139	0.147	0.198	0.541***	0.236	0.350**	0.220†	0.329**
	自己	0.124	0.246*	0.145	0.062	0.112	0.317**	0.702***	0.363**	0.397**	0.437***	0.473***
	努力可能	-0.009	-0.068	0.055	-0.009	0.024	-0.067	-0.122	0.084	-0.110	0.025	-0.008
	運	0.264*	0.220†	0.346**	0.196	0.295*	0.406**	0.305*	0.218†	0.202	0.239†	0.260*
主楽観主義	統制	0.176	0.088	0.294*	0.128	0.229†	0.219†	0.096	0.233	0.035	0.190	0.174
	楽観	0.242†	0.147	0.278*	0.252*	0.292*	0.324**	0.365**	0.313*	0.374**	0.307*	0.401**
	悲観	-0.085	0.064	-0.265*	-0.215†	-0.264*	-0.012	-0.504***	-0.240†	-0.342**	-0.246*	-0.336**

注：\*\*\* $p < 0.001$ 、\*\* $p < 0.01$ 、\* $p < 0.05$ 、† $p < 0.1$

表4 ポジティブ・イリュージョン尺度、楽観主義尺度とEICA、自尊感情尺度、精神回復力尺度の相関係数（女子：50名）

測定変数		EICA						自尊感情	精神回復力			
		自律性	統制	同一化	情緒的支持	受容性	統制性		新奇性追求	感情調整	肯定的な未来思考	精神回復力合計
イリュージョン・ポジティブ	社交性	0.026	-0.067	-0.242†	0.230	0.035	-0.046	0.623***	0.637***	0.395**	0.563***	0.621***
	容姿	-0.027	-0.083	-0.162	0.089	-0.028	-0.131	0.526***	0.501***	0.396**	0.421**	0.527***
	やさしさ	0.137	-0.203	-0.156	0.075	-0.035	-0.066	0.517***	0.287*	0.348*	0.224	0.362*
	自己	0.051	-0.133	-0.236†	0.177	-0.003	-0.091	0.684***	0.604***	0.461**	0.517***	0.630***
	努力可能	-0.072	0.200	0.181	-0.069	0.054	0.144	-0.196	0.058	0.047	-0.059	0.028
	運	-0.185	-0.033	0.086	0.335*	0.318*	-0.268†	0.485***	0.374**	0.270†	0.224	0.352*
主楽観主義	統制	-0.168	0.135	0.193	0.150	0.236†	-0.051	0.143	0.273†	0.201	0.091	0.236†
	楽観	-0.081	0.060	-0.050	0.118	0.063	-0.031	0.503***	0.522***	0.625***	0.621***	0.720***
	悲観	-0.122	0.161	0.045	-0.310*	-0.219	0.037	-0.456**	-0.346*	-0.171	-0.493***	-0.372**

注：\*\*\* $p < 0.001$ 、\*\* $p < 0.01$ 、\* $p < 0.05$ 、† $p < 0.1$

られた。また、楽観主義尺度の「悲観」と精神回復力尺度の「肯定的な未来思考」「精神回復合計」においては有意な負の相関があった。

これらのことから、楽観的な女子ほどレジリエンスが高いということが示され、予想4が支持される結果となった。また、親から「同一化」的な育て方を受けた場合（子ども中心主義や親が子どもに対して所有欲を出した育て方など）、若干ではあるが自己（特に社交性）に対するP.I.がマイナスに働く傾向があることが示唆されている。また、『自己』領域でP.I.が働いている場合、精神回復力の特に「新奇性追求」の項目について、男子よりも高いことが明らかになった。

## 2. 重回帰分析

つぎに、これら変数間での複合的な相関関係を明らかにするため、P.I.を測定する質問紙と楽観主義尺度を目的変数、EICA（親子関係診断尺度）、自尊感情尺度、精神回復力尺度を説明変数とする重回帰分析を、全体および性別（男子・女子）ごとに変数強制投入法で行った。その結果、重相関係数が有意（ $p < 0.05$ ）または有意な傾向（ $p < 0.1$ ）にあったものだけを表5～7に示す。

### 2-1. 被験者全体について

全体（表5）ではP.I.の「社交性」に関して、「自尊感情」と精神回復力尺度の「新奇性追求」において標準偏回帰係数が有意であり、係数はどちらも正であるが「自尊感情」においてやや高い値がみられた。また、P.I.の「やさしさ」に関しては自尊感情と肯定的な未

来思考において標準偏回帰係数が有意であるが、係数は「自尊感情」が正、「肯定的な未来思考」が負であり、値は自尊感情がやや高かった。また、楽観主義尺度の「悲観」においてはEICAの「統制」「同一化」、「自尊感情」、精神回復力尺度の「肯定的な未来思考」において標準偏回帰係数が有意で、係数はEICAの「統制」が正、それ以外は負であり、値は「自尊感情」が一番高く、「肯定的な未来思考」とEICAの2つの下位尺度は同程度であった。

これらのことは予想1を支持する結果であり、先行研究の自己肯定感と同様にP.I.傾向の高さと「自尊感情」の高さには関係があるということが明らかになった。また、P.I.傾向の高さとレジリエンスの高さとも関連があるということが示されており、相関分析と同様に予想4も支持された。しかし、P.I.傾向と親子関係においてはあまり関連性がみられなかったので予想2と3の検証にはやはり至っていない。

### 2-2. 性別ごとについて

男子（表6）については、P.I.の「容姿」においてEICAの「情緒的支持」と「自尊感情」で標準偏回帰係数が有意であり、EICAの「同一化」では標準偏回帰係数が有意な傾向にあった。係数は「同一化」と「自尊感情」が正であり、「情緒的支持」が負で、値は「自尊感情」が一番高く、次いで「情緒的支持」、「同一化」の順であった。また、P.I.の「やさしさ」ではEICAの「統制」と「自尊感情」において標準偏回帰係数が有意であり、精神回復力尺度の「肯定的な未来思考」において標準偏回帰係数は有意な傾向にあった。係数は「統制」と「自尊感情」が正で、「肯定的な未来思考」

表5 ポジティブ・イリュージョン尺度と楽観主義尺度を目的変数とする重回帰分析（全体：116名）

目的変数	重相関係数R	自由度調整済R自乗	標準偏回帰係数 $\beta$					
			統制	同一化	自尊感情	新奇性追求	肯定的な未来思考	精神回復力合計
社交性 容姿 やさしさ 運	0.731***	0.499			0.502***	0.368**	-0.309*	
	0.599***	0.310			0.530***			
	0.549***	0.250			0.488***			
	0.478***	0.171	0.194†		0.327**			
自己	0.725***	0.490			0.595***			
楽観 悲観	0.582***	0.289						0.569**
	0.561***	0.264	0.236*	-0.202*	-0.440***		-0.319*	

注：\*\*\* $p < 0.001$ 、\*\* $p < 0.01$ 、\* $p < 0.05$ 、† $p < 0.1$

表6 ポジティブ・イリュージョン尺度と楽観主義尺度を目的変数とする重回帰分析（男子：66名）

目的変数	重相関係数R	自由度調整済R自乗	標準偏回帰係数 $\beta$					
			自律性	統制	同一化	情緒的支持	自尊感情	肯定的な未来思考
社交性 容姿 やさしさ 運	0.754***	0.509					0.547***	-0.365†
	0.690***	0.402			0.233†	-0.387**	0.606***	
	0.599**	0.269		0.269*			0.481***	
	0.516*	0.164	0.263*	0.257†				
自己	0.754***	0.508		0.190†			0.633***	
楽観 悲観	0.523*	0.171	0.230†	0.233†				
	0.553**	0.209					-0.462**	

注：\*\*\* $p < 0.001$ 、\*\* $p < 0.01$ 、\* $p < 0.05$ 、† $p < 0.1$



表7 ポジティブ・イリュージョン尺度と楽観主義尺度を目的変数とする重回帰分析（女子：50名）

目的変数	重相関係数R	自由度調整済R自乗	標準偏回帰係数 $\beta$					
			同一化	受容性	統制性	自尊感情	新奇性追求	肯定的な未来思考
社交性 やさしさ 運	0.739***	0.457				0.392*	0.468*	
	0.559*	0.179				0.451*		
	0.709***	0.405		0.530**	-0.296*	0.604**		
自己	0.762***	0.498				0.453**	0.422*	
楽観 悲観	0.767***	0.507	0.395*	-0.284†				0.824**
	0.639**	0.292				-0.377*	-0.704**	0.606†

注：\*\*\* $p < 0.001$ 、\*\* $p < 0.01$ 、\* $p < 0.05$ 、† $p < 0.1$ 

が負であり、値は「自尊感情」が一番高かった。

これらのことから、男子においては容姿についてP.I.が働いている場合、「自尊感情」もそれに伴って高くなり、思春期に親から独立心を奨励してもらっていると感じている傾向があるようである。これは予想1と2の一部を支持する結果である。また、自分自身の「やさしさ」についてP.I.が働いている場合にも自尊感情が高くなる傾向にあり、思春期において親から厳しくされていたと感じている傾向があることがうかがえる。これは思春期に親から厳しくされたため、他人には優しくあろうという反動があるのかもしれない。

女子(表7)については、P.I.の「運」においてEICAの「受容性」「統制性」「自尊感情」で標準偏回帰係数がそれぞれ有意であった。係数は「受容性」と「自尊感情」が正で、「統制性」が負であった。値は「自尊感情」と「受容性」が同程度で、「統制性」は低かった。また、楽観主義尺度の「楽観」はEICAの「同一化」と精神回復尺度の合計において標準偏回帰係数がそれぞれ有意であり、EICAの「受容性」では標準偏回帰係数が有意な傾向にあった。係数は「同一化」と「精神回復力合計」が正であり、「受容性」が負であった。値は「精神回復力合計」が最も高く、「同一化」と「受容性」はそれほど高い値ではなかった。楽観主義尺度の「悲観」では、「自尊感情」と精神回復力尺度の「肯定的な未来思考」において標準偏回帰係数が有意であり、「精神回復力合計」は有意な傾向にあった。係数は「精神回復力合計」が正で、「自尊感情」と「肯定的な未来思考」が負であった。値は「肯定的な未来思考」が最も高く、次いで「精神回復力合計」、「自尊感情」の順であった。

これらことから、女子においては「運」におけるP.I.が働いている場合、「自尊感情」がそれにとまって高くなり、思春期に親から独立心を奨励してもらっていると感じている（親からの統制をあまり感じていない）傾向にあるということが示され、これも男子と同じように予想1と2の一部を支持する結果となった。しかし値はどれもさほど高いわけではないため、きょうだい関係なども明確にした上でもう一度検証する必要があるだろう。

#### 引用文献

Alloy, L. B., & Abramson, L. Y. (1979) Judgement of contingency in depressed and nondepressed students:

Sadder but wiser? *Journal of Experimental Psychology General*, **108**, 441-485.

Carver, C. S., & Scheier, M. F. (1985) The Self-Consciousness Scale: A revised version for use with general populations. *Journal of Applied Social Psychology*, **15**, 687-699.

Duval, T. S., & Wicklund, R. A. (1972) *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.

遠藤由美 (1995) 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論. *社会心理学研究*, **11**, 134-144.

伊藤裕子 (2001) 青年期女子の性同一性の発達—自尊感情、身体満足度の関連から—. *教育心理学研究*, **49**, 458-468.

上出寛子・大坊郁夫 (2004) 友人比較自己認知が精神的影響に与える影響—新密度と自己重要土との関連—. *日本社会心理学会第45回大会発表論文集*, 314-315.

葛西真記子・永尾修一 (2004) 中学生の自尊感情・規範意識と親子関係との関連性. *鳴門教育大学学校教育実践センター紀要*, **19**, 25-34.

Langer, E. J. (1975) The illusion of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 311-328.

Masten A, Best K, & Garmezy N. (1990) Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, **2**, 425-444.

水野江美・西本実苗・井上健 (2006) 青年期におけるポジティブ・イリュージョンと心身症状、自己肯定感について. *臨床教育心理学研究*, **32**, 29-36.

中村陽吉編著 (2000) 対人場面における心理的個人差—測定対象についての分類を中心にして—. プレーン出版.

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002) ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的と特性—精神回復力尺度の作成—. *カウンセリング研究*, **35**, 57-65.

Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press.

Schaefer, E. S. (1965) Children's reports of parental behavior: An Inventory. *Child Development*, **36**, 413-426.

田中道弘 (2005) 自己肯定感尺度の作成と項目の検討. *常磐大学人間科学論究*, **13**, 15-27

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988) Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.

外山美樹・桜井茂男 (2000) 自己認知と精神的健康の関係. *教育*

心理学研究, **48**, 454-461.

辻岡美延・山本吉廣 (1978) 親子関係の類型－親子関係診断尺 EICA－. 教育心理学研究, **26**, 84-93.

Weinstein, N. D. (1980) Unrealistic optimism about future life events. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 806-820.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, **30**, 64-68.

#### 参考文献

Alicke, M. D. (1985) Global self-evaluation as determined by the desirability and controllability of trait adjectives. *Journal of Personality and Social Psychology*, **49**,

1621-1630.

Brown, J. D. (1986) Evaluations of self and others: Self-enhancement biases in social judgments. *Social cognition*, **4**, 353-376.

遠藤由美 (1999) 「自尊感情」を関係性からとらえ直す. 実験社会心理学研究, **39**, 150-167.

Shedler, J., Mayman, M., & Manis, M. (1993) The illusion of mental health. *American Psychologist*, **48**, 1117-1131.

Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1994) Positive illusions and well-being revisited: Separating fact from fiction. *Psychological Bulletin*, **116**, 21-27.